

	学校名: 新島村立式根島中学校	
	氏名: 高田 裕行	● 実践教科等 : 社会科
		● 時間数 : 7時間
THAILAND	[担当教科: 社会科]	● 対象生徒 : 小学6年から中学3年
		● 対象人数 : 16人

1 単元名

「水」から考える国際協力！

2 単元の目標

- (1) 日本と世界各国が相互依存の関係にあることを理解すると共に、国際社会の中で日本が果たす役割について自覚することができる。【つながりを尊重する態度】
- (2) 国際社会の課題や問題について参加型・体験型の学習を通し、当事者意識を高めると共にJICA研修員や青年海外協力隊経験者の体験談や生き方に触れる中で自らの行動に活かすことができる。【進んで参加する態度】
- (3) 世界の諸問題と式根島における課題を分析・検討し、共通点や相違点を把握することで持続可能な社会の形成に向けて政策を立案することができる。【未来像を予測して計画を立てる力】
- (4) 国際協力の意義や国際理解を深めると共にコミュニティの問題を解決するに当たっての住民の意思や現地の文化、風習等を理解することの大切さを理解することができる。【他者と協力する態度】

3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点(国立教育政策研究所・2014)

1 意味のある問いや課題で学びの文脈を造る

- ① 社会科の授業では、論理的かつ科学的に考察できるよう「なぜ」の問いに基づいて授業を展開してきた。本単元においては特に「当事者」として「世界」の問題にアプローチできるように身近な事例(ワーク)や「なぜ」の問いを追求したくなるような教材を用意した。

2 子供の多様な考えを引き出す

- ① 実社会においては、同年齢集団のみで話し合いを行うということは少ない。異文化や異年齢集団の中で「多様な考え」に触れ、問題を解決していくスキルを身につけるため、本単元では小学校6年生から中学校3年生での合同開催とした。さらにJICA出前講座を実施することで外国の方に意見や質問をする機会を設けた。

3 考えを深めるために対話のある活動を導入する

- ① 既習事項を活用しながら、仮説を考えたり、検証したりし、問いを解決させる。
- ② グループ活動を通し、生徒が協力して主体的に学べる場を設定する。

4 考えるための教材を見極めて提供する

- ① 授業のねらいを達成するためのワークや教材を使用する。本単元では主にフォトランゲージを活用し、写真から読み解くという状況を多く設定することで生徒の内発的動機付けを喚起したい。
- ② 体験型・参加型の教材を使う。例えば1時限目では相互依存度神経衰弱ゲームを通して日本と世界の関わりを実感させたり、2時限目では「水」「スポーツドリンク」「OS1」を飲み比べる活動を通して問いに迫っていくことで日本と世界のつながりを実感させたい。

5 すべ・手立ては活動に埋め込むなど工夫する

- ① 基本的には教師は発問や活動のヒントを与えるだけで、生徒が自主的に「授業を作っていく」という状況にしている。自分で考え、自分で学ぶため、説明は短くしていく。

6 子供が学び方を振り返り自覚する機会を提供する

- ① 本単元では、MQに対する仮説と授業後の感想や意見を比較することで、生徒の認識がどのように変化しているのか読み取っていく。また次の授業でそれぞれの生徒の意見や考えに触れる機会を意図的に作ることで振り返りを自覚させたい。

7 互いの考えを認め合い学び合う文化を創る

- ① 生徒が発言しやすい雰囲気や意見を尊重される場にするために本単元ではワールドカフェの手法を用いながら授業を展開していく。また、多様性を尊重しながら授業をしていく。

4 単元の指導について

(1)教材観

本単元は、「水」を切り口に国際協力の在り方や世界の現状を生徒と考えていく構成になっている。例えば、本単元の2時限にあたる「コップの水から考える」では、発熱や脱水症状を防ぐ役割があり商品化されているOS1を教材として用いる。OS1といえば所ジョージのCMで良く放送されていることから生徒の認知も高い。そんなOS1が1杯5円と安価に作れるにもかかわらず、途上国ではなかなか普及せず脱水症状により亡くなる人数も少なくない。この「5円なのに普及しない」それが「なぜ」なのか思考させる過程を通して国際協力が簡単ではないということや地球市民としてどう向き合っていくか「当事者意識」に重点を置いて授業を進めていきたい。また日本と世界各国が相互依存関係にあることを神経衰弱ゲームから実感したり、4、5時限目で実施するJICA出前講座でのJICA研修員や青年海外協力隊員の話から地球市民としての生き方や国際協力の意義を理解させたい。

(2)児童生徒観

社会科授業では、生徒がこれから生きる社会生活の中で直面するだろう様々な問題を取り上げ、それらを論理的かつ科学的に考察できるよう「なぜ」の問いに基づいて授業を展開してきた。普段は明るく元気な生徒であるが、大人数の大人に囲まれると消極的になってしまう時があるので、指名やグループ活動を通し、参加型・体験型の授業を構成し主体的に学ぶ事ができるようにしたい。また、思考を伴う問題に差し掛かった時、班での意見交換や教師からのヒントをもとに、生徒が多様な考え方や意見に触れられるようにする。

(3)指導観

第5章「地球社会と私たち」は国際社会における我が国の役割について考えさせると共に、人類の一員としてよりよい社会を築いていくために解決しなければならない様々な課題について探求させ、自分の考えをまとめさせることを主なねらいとしている。この単元は学習指導要領(4)私たちと国際社会の諸課題の(イ)「より良い社会」に当たる部分であり、持続可能な社会の形成という観点から課題を設けて探究し、生徒が様々な社会的問題を多面的・多角的に考察し、地球市民の一員として日常生活や身近な事例を通し、対立と合意・効率と公正など多様な側面から世界の課題と現状、論点を把握し、自己の問題として主体的に考え、判断し、実践できる力を育成したいと考えている。

5 評価基準

観点	社会的事象への 関心・意欲・態度	社会的な 思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての 知識・理解
評価規準	よりよい社会を築いていくために解決すべき課題を意欲的に探求している。また、持続可能な社会の形成に対する関心が高まっている。	身近な地域の生活や我が国の取り組みとの関係性に着目し、持続可能な社会を形成するために解決すべき課題を見いだしている。	持続可能な社会を形成するために解決すべき課題に関する資料を様々な情報手段を活用して収集している。また課題の探求に役立つ情報を適切に選択して、読み取り図表などにまとめたりしている。	①世代間の公平、地域間の公平、男女間の平等、社会的寛容、貧困削減、環境の保全と回復、天然資源の保全、公正で平和な社会などが持続可能な社会の形成の基礎となることを理解し、その知識を身に付けている。 ②
評価方法	ワークシートの記述、レポート、プレゼン発表			

6 単元の構成

時限	小単元名	学習のねらい	授業内容
1	世界とつながる日本	○日本と世界の国々の相互依存関係について理解する。	●相互依存度神経衰弱カードを活用し、身近な生活で使用しているものが世界の様々な国と関連していることを体験的に学ばせる。また新興国の台頭と南北問題などにも触れながら国際協力の意義や世界と日本との関わりを身近に考えさせたい。
2	コップの水から考える	○国際協力の難しさを実感すると共にODAの使用方法について自分の意見を発表することができ	●[水]「ポカリスウェット」「OS1」を実際に試飲させる。その中でOS1が発熱や脱水症状を防ぐ役割があり商品化されていることも理解する。このOS1は一杯5円で作ることができ

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		る。	るが、世界では普及せず多くの人間が脱水症状等で亡くなっている。なぜ1杯5円で作れる物が普及しないのかその原因を追及する過程で国際協力の難しさを実感させたい。またODAについても理解し、日本の国際協力活動を経済面から考えさせていきたい。
3	トイレの水、あなたは飲めますか？ (本時)	○国際協力が資金協力だけでなく技術援助による役割があることを JICA の活動から理解する。	●途上国では多くの水問題を抱えている。その中でも技術的な要因で飲食用の水と排出用の水(トイレ)の水が分水できず、感染症などの問題を引き起こしていることを、フォトランゲージを活用し、追求していく。その中で「国際協力が資金援助だけでいいのか？」という発問を投げかけ、JICA の活動を紹介する。日本人が途上国で懸命に活動する姿に国際協力の意義を理解させたい。
4・5	JICA 出前講座	○世界の同世代の子供たちの姿を理解する。 ○国際協力の意義を理解する。	●JICA 研修員による出前講座を実施する。JICA の活動について現場での経験を研修員(カンボジア・ベナン)の二人が講義する。 ●教育や生活、観光、産業など多方面の分野に触れながら実施する。
6	国際連合の 仕組みと役割	○国際連合の仕組みと役割について理解する。	●国際連合の役割について理解すると共に地球規模の課題に対してどこの国際機関が主に何を担当しているのか、さらには問題解決に向けた事案決定方法はどのように定められているのか理解させる。
7	ケーキを分けよう	○国際的な課題に対し、地球市民としてどのように解決にむかっていくのかを考える過程を通して、その問題が「自己の問題」として考え意見を発表することができる。	●ホールケーキを分けるという活動を通して形式的平等と実質的平等について学ぶ。食料や教育、エネルギー資源を事例としてそれらが平等に配分されない理由を考え、自分が「国連職員」になったらという設定で、ダイヤモンドランキングを作成する。当事者意識を持って取り組ませることで国際協力の意義と難しさを再度実感させたい。

7 授業事例の紹介

小单元名【 トイレの水、あなたは飲めますか？ 】

(1) 指導案

(ア) 実施日時 12月2日(金) 第3限

(イ) 実施会場 式根島中学校 教室

(ウ) 本時の目標

- ・「地球市民(当事者)」として世界が抱える「水」の問題の深刻さを理解するとともに、その問題の解決に向けて自分の意見や考えを発表することができる。 【進んで参加する態度】

(エ) 指導のポイント

本時では、「水」を切り口として、その原因と開発途上国の現状を理解する過程を通して、「国際

協力の意義」について迫っていききたい。生徒が「当事者意識」をもって主体的に授業に参加していけるよう本授業では、課題探求型の問いを設定した。課題を探究する過程で特にフォトランゲージの手法を活用し、課題解決に関係するであろう写真を自分で選ばせることでより深く考えられるように工夫した。また、JICA の国際協力活動を紹介し、国際社会の中での日本の役割や意義を同時に考えさせ、次回の JICA 出前講座での研修員の講座がより生徒にとって当事者意識を育ませる布石になるように生徒の多様な考えを引き出していきたい。

(オ) 本時の展開(【 】は「3 資質・能力育成に向けた授業づくりの視点」)

過程時間	指導内容	学習活動	指導形態	指導上の留意点	評価 (評価規準・評価方法)
導入		○課題「トイレの事件簿」		●課題探求型の問いを設定し、仮説を考えさせる。 ●ホワイトボードに20枚近くの水に関する写真を貼る。生徒は自席からホワイトボードに写真を選びに行く。選べる写真は1枚のみとする。 ●普段のトイレでの自分の行動を振り返ってもらう。 ●ワークが困難な班に対してはiPad を使って自分で「トイレ・水・感染症」で調べさせる。 ●国の経済レベルが上がっているという点に着目させたい。人口の増加と技術整備が追いつかず、飲料などに使う生活用水の水源を汚染と切り離すことができずにいることを理解させたい。	
	トイレの事件簿	T:なぜA国でこのような事件が起こっているのだろうか？ S:水が汚いから。手が洗えないから。便座が汚い。 T:手が洗えない、水が汚いだけで簡単に感染症になるだろうか？ S:そんな簡単にはならない。 T:では、どういう状態なら感染症になる？ S:汚染された水が体内に取り込まれた時、健康被害を起こす。	班活動		
	MQ:なぜ世界では、安全な水が普及しないのだろうか？				
展開	世界の水事情	○「安全な水」 T:世界には安全な水を得られない人がどれくらいいるのだろうか？ S:たくさんいる。健康被害や生産活動に影響を及ぼしていると考えられる。 T:どのような国に多いかな？ S:アフリカに多い。 T:地図ではアフリカに集中しているが、ブラジルやインドなど近年経済発展をしている国も安全な水を得られていない。ところで、日本はどのような支援をしていたか覚えている？ S:ODA、政府開発援助。 T:そうですね。でもトイレの事件のような問題を解決する場合はお金の援助だけで十	一斉	●衛生的なトイレが使えない人は世界に26億人いることや安全な水とトイレがあれば予防できる下痢のために全世界で毎年180万人が死亡し、子供の死因の第二位であることを理解させたい。 ●世界地図を提示する。 ●アフリカだけでなく近年経済成長を遂げている国々も「安全な水」が十分に得られていないことを理解させる。 ●日本はなぜ安全な水を手に入れているか、世界ではなぜ安全な水を手に入れない国があるのか理解させる。 ●上下水道の技術力に気づかせる。	

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

		分だろうか？			
		SQ1:国際協力は資金援助だけでいいのだろうか？			
		S:よくない。 S:技術援助も必要だ。	一斉		
	JICAの 水支援	T:この記事から読み取れることは何だろうか？ S:多くの日本人が日本の上下水道を世界に普及させていること、131カ国もの国に支援している。 T:支援している組織はどこ？ S:JICA。 T:では、最後に日本の技術実力を確認して終わしましょう。今から日本の水とタイの水を見せます。どちらが日本の水か答えは明白ですね。	一斉	● JICAのmundiの記事を配布する。 ● JICAの概要を説明する。 ● 日本とタイの水を提示する。	
まとめ	本時の まとめ	○ 水に対する認識の変化とJICAの取り組みについて感想を書く。	一斉	● MAを書く。また本時の学び・感想をワークシートに記入する。 ● MQの仮説とまとめの記述を比較することで生徒の認識の変容を読み取る。【進んで参加する態度】	【評価】 「当事者」として水問題の解決に向けて自分の意見を発表することができる。

(2) 授業の振り返り

①よかった点

海外研修で得た「現地での水」を実物教材として使用したり、トイレを切り口に授業を構成したことで身近な問題から当事者意識を高める授業を実施できた。

②改善すべき点

世界の問題を考え、理解を実感に変えるためにJICAや日本人学校、インターナショナルスクールとも連携を図り、「多様性」を肌で感じれる授業を展開することでさらに現実社会に近づけたい。

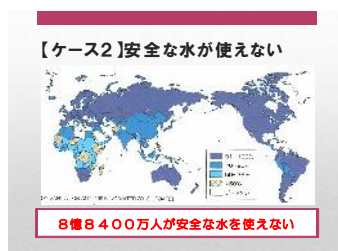
(3) 使用教材(パワーポイントのスライドを一部 抜粋)



課題「トイレの事件簿」

A国は近年、人口が増加し経済的にも発展してきました。そんなA国ですが、最近、原因不明の感染症で多くの方々が亡くなっているそうです。A国に住む住民は皆「トイレ」を指差し「あれが原因だ」と言います。さて何が原因なのでしょう。後ろにある写真を手掛かりとし、事件を解明しなさい。

MQ:なぜ世界では、安全な水(トイレ)が普及しないのだろうか？



(4) 参考資料等

- ・『水から広がる学び』開発教育教会（2014）
- ・『mundi-特集水道日本、世界へ』 JICA（2016）
- ・『国際理解教育実践ハンドブック』 埼玉県総合教育センター 監、廣済堂（2013）
- ・『JICAの仕事』 独立行政法人 国際協力機構 広報室(2014)

8 単元をととした児童生徒の反応/変化

授業前に本校生徒の国際理解についての知識や認識がどの程度のものなのか把握するためにアンケートを実施した。アンケートの最後に「国際協力について知っていることを書きなさい」という項目を設けた。そして全授業が終了した後に再び「国際協力について今あなたが思う事を述べなさい」という問いを設け意見を述べさせた。ここでは、2名の生徒の授業前と授業後の認識の変容を紹介したい。

【Aさんの場合】

授業前	授業後
問:国際協力について知っていることを書きなさい	問:国際協力についてあなたが思う事を書きなさい
ユニセフ募金 青年海外協力隊	私たちが当たり前に飲んでいる水は途上国では安全ではないということJICAの方のお話を聞いて驚きました。これからは私たちができることを考え将来なにか困っている人のために役立てたいと思います。(中略)

【Bくんの場合】

授業前	授業後
問:国際協力について知っていることを書きなさい	問:国際協力についてあなたが思う事を書きなさい
ユニセフ 青年海外協力隊 物資支援をしたり、教育をしている	国際協力は募金などの支援だけでなく物資支援や教育のための支援が大事だと思いました。戦後、日本が外国に様々な支援をもらったことに対して次は日本がその恩を返していく番だと思いました。世界に目を向けることが大切だと思いました。(中略)

二人の生徒の授業前と授業後の国際協力に対する認識の変容は明らかである。本校の生徒数は13人であるが、ほとんどの生徒が上記2名の生徒と同じように授業前は国際協力に対し「青年海外協力隊」や「ユニセフ」といった単語だけの知識しかもっていなかったものが、授業後は世界の現状を自分で分析し自己の問題として捉えることができています。

9 授業実践全体の成果と課題及び課題の改善策

(1) 授業プランと(PPLAN)

- ・国際協力の意義や必要性について自覚する。また日本と世界が相互依存の関係にあることを通して自己の問題として世界の問題を自覚する。
- ・教室の中に様々な「多様性」を作り出し、相手の価値観や生き方を受容しながら国際協力を行う上で重要な観点、支援の在り方を学ぶ。

(2) 成果と課題(DO～CHECK)

- ・上記に示した生徒の変容からも読み取れるよう国際協力に対する理解は深まった。また一方的な支援だけでなく、パートナーとしての関係づくりに言及する生徒も多く国際協力への見方も広まった。
- ・当事者の立場に立って考えることができた生徒もいる一方で、理解が実感に発展しない生徒もいた。

(3) 課題の改善策(ACTION)

- ・今後は「理解」が「実感」に確実に変容し、少しでも現実社会の状況に近づけるために日本人学校やJICA等の関係機関と連携し、例えば外国人と生徒を同じグループにするなど共同授業の実施を提案し、新たな「多様性」を取り入れることができる授業にしていきたい。

10 教師海外研修に参加して

「百聞は一見に如かず」ということは、このことであると痛感した。今回の研修を通して自分の目で確かめた現実を、教科書では語れない真実を伝えていくことが必要だということを実感できた。また、変化が激しく多様な価値観や考え方が混在している今の時代だからこそ、教師は常に世界に目を開いて学

JICA 教師海外研修 授業実践報告書フォーマット

び続けなければいけないことも再認識することができた。事前研修から事後研修に至るまでここまで満たされる研修ははじめてであった。この経験は「誰もがすることではない」ことを自覚し、またここからが「教師」としての新たなスタートとして学びを続けていきたい。